

『般若心経』は、最もなじみのあるお経の一つです。また、写経のお手本として、書き写されたことがある方も多くいらっしゃるでしょう。

現在親しまれている『般若心経』は、三蔵法師の名で知られている中国の玄奘三蔵が、インドの言葉を翻訳したものです。当時のインド、遠く天竺の地からたくさんのお経を持ち帰り、私たちが知っている漢字の経典へと翻訳をされたということです。長い旅路や長期間にわたる翻訳など、大変なご苦労があったことでしょう。

『般若心経』の正式な題名は、『摩訶般若波羅蜜多心経』といいます。最初に、「大きい」とか「勝れた」という意味の「摩訶」という言葉がつき、「般若」とは「智慧」のこと。とりわけ、日常の生活においてあるものと別のものとを区別する知識ではなく、仏の教えを表す「智慧」を意味する言葉です。その智慧がおよそすべての境地まで達成された状態のことを「般若波羅蜜多」といいます。

『摩訶般若波羅蜜多心経』における「心」、「ころ」の文字は、心臓という意味を持っています。心臓は、私たちの意思にかかわらず、命ある限り脈動を続ける臓器であり、古来より、命そのものを成し立てしめるものと考えられていました。そこから転じて、物事の欠くべからざる要という意味でも用いられています。

『般若心経』は、文字通り、「心経」として、般若経典の心髄を伝えるお経なのです。

『摩訶般若波羅蜜多心経』を短く『般若心経』、さらに短く『心経』と呼ぶこともあり、長い歴史において古来より多くの方に親しまれ、最も大切にされてきたお経であるといえます。

『心経』という呼び名は、英語に翻訳されるときに、「ハート・スートラ」と呼ばれることがあります。『般若経』の要となる教えを伝えてくれるという意味だけではなく、仏教において、その心臓に値するほど大切な経典であるという気持ちが込められているといえるでしょう。